

# 関西における声楽家の人材育成についての現状と提言

関西歌劇団オペラ研修所、関西二期会オペラ研修所、堺シティオペラアカデミーを中心に

中村 孝義

## ■ はじめに

舞台上でオペラを演じるというのは、クラシックの領域で歌手を志したのなら誰もが見る夢である。ただこのことは口で言うほど簡単なことではない。歌唱技術を持っていることはもちろん絶対的な必要条件だが、それがあるだけでは舞台上でオペラを演じる歌手になるには十分ではないからだ。舞台では様々な所作を伴う演技力が要求されるし、しかもそれはある特定の時代や国に特有の所作だけに限らない。オペラはそれこそあらゆる時代や国を物語の背景として持つからだ。さらに、もし優れた歌唱技術や演技力を持っていたとしても、それを実際の舞台上で演じたことがなければ、一人前の歌手としての演唱は不可能である。まさに舞台人としての経験と資質が必要不可欠なのだ。

歌手になるためには、ふつうはまず大学の声楽科で声楽を学ぶ。もちろん現在の大学は、例えば筆者が勤める大学では、本格的なオペラハウスを備えており、そこで歌唱以外にも様々な経験を積むことができる。とはいうものの、すべての学生が、十分に高い頻度で舞台経験を積めるほどの時間的、空間的余裕はないのが現状である。そのため大学や大学院を出たからといって、直ちにオペラ歌手ができるほどの能力をすべての学生が身につけることができるわけではない。

もちろん世に存在するすべてのオペラ・グループは、この問題を熟知しているだけに、これまで様々な手を尽くしてきた。関西では、大阪音楽大学を母体とするザ・カレッジ・オペラハウス、びわ湖ホール、兵庫県立

芸術文化センターなど、ホールを拠点にオペラ制作活動を展開しているところとは別に、いわゆる歌を本業とする人たちが集まった関西歌劇団と関西二期会という、長い伝統を持つ二つの大きなオペラ団体がある。本稿では、この二つのグループが、大学を出た若手歌手たちを、いかにオペラの舞台上で活躍できる人材へと育てているか、その研修制度を報告していきたい。加えて前記二つの団体と少し組織や活動のあり方を異にしながら、近年充実した公演活動を通じて成果を上げている堺シティオペラの人材育成活動にも触れておきたい。

## ■ 関西歌劇団オペラ研修所

最初に関西歌劇団の人材育成活動について説明していくことにしよう。この団は1949年に、朝比奈隆を中心に関西の声楽家が集まって設立された、関西で一番の老舗のオペラ団体である。諸所曲折はあったが、現在はNPO法人関西芸術振興会のもとで活動を展開している。この団はオペラ研修所と名付けられた研修所を持ち、ここでこの団の活動を支える後継者の育成を行ってきた。毎年3月に準団員、正団員の募集と併せて研修生の募集を行う。応募できる資格は、基本的には音楽専門大学を卒業した人であるが、一般大学卒業でも同等の力を持っていれば受験することはできるし、現実に受験者はいるそうである。試験は、オペラアリアを2曲、モーツァルトとそれ以外のものを原語で歌って行われる。募集人数は特に公にはされていないが、2014年3月の場合には13人の受験者があり11

名が合格した。研修期間は3年で、1年目は研修生として学び、2年目に入るときに試験を受けて受ければ準団員の資格を与えられる。2年の研修を終えても準団員のレベルに達しないときは、改めてオーディションを最初から受け直すことを求められることもある。研修生、準団員として併せて3年の研修期間を経た後、改めて試験を受けて、正団員への道が開かれる。

研修の実際をご紹介すると、その特徴は、いわゆるきっちり決められたカリキュラムがあって、それを遺漏なくこなしていくというシステム化されたスタイルをとらず、むしろ講師が研修生の実態（つまり声や能力）にあわせて、臨機応変にオペラの実際を学んでいくというスタイルをとることである。研修を許された研修生は、最初に歌劇団幹部によってその声をチェックされ、その人の声にふさわしい演目を勉強するクラスに配属される。詳細なカリキュラムはないと前述したが、もちろん全てをいき当たりばったりで学ばせていくわけではない。研修は火曜日と水曜日に行われる全部で3つのクラスが、18時から21時までの3時間を、年間30回にわたってみっちり様々な作品について学んでいく。火曜日には2つのクラスが開かれており、そのうち一つはモーツァルトのオペラを中心に学んでいくが、もう一つのクラスは、まだそこまでのレベルに達していないため初歩からじっくり勉強しようというクラスが設定されている。水曜日に行われるクラスでは、ドニゼッティ以降のロマン派のものを主として学んでいくことになっている。

最も重要な演習は、歌劇団所属のプロの歌手を講師として、歌唱と演技を中心に学ぶ「オペラ演習」であるが、もちろんそれに留まらず、全30回の内にはディクッション（発音練習、イタリア語）が前期後期に1回ずつの計2回（必要に応じて増えることもある）、

メイクの講習が1回、さらに日舞などの踊りの講習も2～3回加わる。また演技も状況に応じて1～2回の講習があるが、これはオペラ演習においても実戦的に指導される。もし時間が許せば、もちろん他のクラスの講習を聴講することも可能である。

以上が研修所での講習のあらましであるが、歌劇団理事で、研修を担当する清原邦仁氏によれば、研修所での研修の大きな意味は、大学までではなかなか経験することのできない制作の現場を、身を持って体験することだという。例えば歌劇団の本公演におけるコーラスに参加して、舞台がどれだけ多くの人によって作り上げられていくかを体験するのは非常に貴重とのことだ。大阪音楽大学の卒業生でもある清原氏は、大阪音楽大学の場合にはザ・カレッジ・オペラハウスを舞台に、多くの学生が舞台を経験できるが、それはむしろ例外的であって、多くの大学ではそうした経験を積んできていないので、このことは非常に重要なことであるということだった。

また1年、あるいは2年3年と、年間を通して演出家や指揮者と活動を共にすることで、全体を通して作品をどう見るべきかという視点や、解釈を学ぶことができることも大事だという。歌手は与えられたキャラクターをそれぞれの視点で作っていくのだが、どうしても一つのキャラクターだけから見がちになってしまう。しかし指揮者や演出家と共に学ぶことで、歌手目線ではなく、キャラクターを、より多角的に見て作っていくことができるようになるそうだ。オペラが実際にどのようにできあがっていくかを知るには、実際の制作現場を数多く経験することが不可欠であるが、実際に舞台経験を積んでいる多くの講師たちとともに、まさにオペラを実戦的に学んでいくわけである。また準団員になったものは、歌劇団の本公演のキャストのオーディションを受けることができるし、実際昨

年の《仮面舞踏会》ではオスカル役が準団員によって行われたということだ。オペラを勉強するというと、どうしても実際の公演を目的に行われることが多いが、それでは本質的なところを見失う可能性があり、その意味でも様々な作品を通じてオペラそのものと同じ向き合う研修は大きな成果を上げているということだ。

### ■ 関西二期会オペラ研修所

つづいて関西二期会のオペラ研修所について説明していくことにしよう。2011年12月より公益社団法人として認定されている関西二期会は、1964年に創立された関西における老舗のオペラ・グループである。その名が示すように、最初は二期会関西支部として発足したが、1980年に関西二期会と名を改め独自の活動を展開している。法人の定款における目的の項で「声楽芸術の研究および後進の育成活動をもって、わが国の芸術文化の発展に寄与する」と謳っていることもあり、「プロとしてのクラシック歌手人材育成事業」を公益目的事業の重要な一つとし、その具体的な事業として、「演奏会及び研修講座等の開催」や「研修生および合唱団の育成と運営」を行ってきた。会の創立当初よりオペラをアカデミックに研究する色彩が強かったこともあって、発足時より研修制度を設け、すでに第1年目より研修生を受け入れたとのことである。当時は、研修期間は1年であったが、現在はそれを2年とし、1年目を予科、2年目を本科としている。入所試験は、予科では歌曲1曲とオペラまたはオラトリオのアリア1曲の計2曲で、本科では、歌曲2曲とオペラまたはオラトリオのアリア3曲（うち1曲は必ずモーツァルトのオペラアリアとする）の5曲を提出し、当日指定された歌曲1曲とアリア2曲で行われる。予科では35名を採

用し、在籍中に様々な試験やオペラ試演会を経て、本科20名に絞られる（落ちた場合も再挑戦は可能だとのことだ）。本科在籍中にやはり試演会やソロ試験、さらには修了オペラが課され、その成果をもとに約10名が準会員として登用される。このように関西二期会では、この研修所制度を、関西二期会の本公演で演唱できるプロの歌手の育成と明確に位置づけている。

現在のように各大学に大学院が設置されていなかった時代においては、個人レッスンが中心である学部卒業では、実際の舞台上で演唱できる能力までを身に付けることが難しく、このような研修制度になったが、現在では大学院修了者も多くなり、海外留学経験者も増え、オペラ研修経験者が増えてきたため、予科をパスして本科にチャレンジすることもできるし、会員試験を受けて能力によっては研修所を経ないで会員になれるというように、多様な受け入れ方に変化してきているとのことである。

さてその研修であるが、予科は火曜日、本科は木曜日のそれぞれ18時から21時までの3時間をかけて授業が行われるが、予科は年間180時間、本科は年間220時間の授業を原則として行うため、内容によって土曜日、日曜日などになることもあるとのことである。その研修内容については、かつては明確なカリキュラムはなかったが、現在は明確なカリキュラムを持ち、予科では、前期にバロック、モーツァルトのオペラからの抜粋を題材に、レシタティーヴォ・セッコに慣れるとともに、演技論講義、初歩的演技実習を通じて、音楽と劇との関係、並びに様式的な音楽と演技的動作の把握が目指されている。後期になると、オペラの他にも歌曲の勉強も重視し、イタリア語、ドイツ語、日本語、フランス語による歌曲をいろいろな面から研究したり、身体動作、メイクの講習などを通じて、舞台

上での様々なシチュエーションに対応する、あらゆる演劇・演技的動作を可能にするための初歩的訓練がおこなわれたりする。また前期ロマン派オペラからの抜粋を題材にした原語を用いた演技演習を通じて、よりダイナミックな表現能力の養成が目指されている。

また本科では、前期においては、和もの所作、邦人作曲家オペラ作品による演技実習と講義を通じて、鮮明かつ美しい日本語唱法へのアプローチと、古典的、あるいは日本的様式に基づいた表現方法の習得が目指される。そして後期では後期ロマン派オペラ、ヴェリズモオペラからの抜粋を題材として、これまでに学んだ、様々なオペラ舞台表現に関するメソッドをもとに、よりドラマティックな表現能力の養成が目指される。そして最後には、オペラ全曲による演技演習を通じて、個々の役柄を作品全体から把握する姿勢や能力の養成が図られている。また研修生には、関西二期会のオペラ公演のGPを見学することも課されている。いずれにしても、声楽指導はもとより、演出家を交えて実際にオペラの制作のイロハを、様々な題材を用いて経験できる2年間の研修は、実際のオペラの舞台に立つうえで、欠かせない経験となるということだ。

ご説明頂いた事務局長の清水光彦氏によると、他の団体では全く見られず、まさに関西二期会のオペラ研修所の肝になるのが、2泊3日で行われる合宿だとのことである。オペラというと、とかく我が我がと大きな声を張り上げることに一生懸命になりがちだが、そうではなく、アンサンブルだとか、関係性の密なものを作るということが大切であるということから合宿が発案されたそう。加えて清水氏は、忙しい日本では難しいことだが、朝から晩まで音楽やオペラのことを考え続ける日が2〜3日あってもよいではないかという思いもあるとのことだ。その意味でこの機

会は非常に貴重で、この伝統は守り続けていきたいとのことであった。関西二期会の会員数は現在582名。すでに50期を終えた研修制度から送り出された会員が1期10名としても500名に上ることから、この研修制度が関西二期会にとってかけがえのないものであることが分かるだろう。

## ■ 堺シティオペラアカデミー オペラスタジオ

さて最後に前記二つの団体とは少し性格の異なる団体として堺シティオペラの研修制度についてご紹介しておくことにしよう。この団体は1978年より市民がリクリエーション活動として参集して始まったが、1986年に堺市を拠点に、市民生活に密着した音楽活動を展開すべく設立された。その後第4回定期公演よりその名を堺シティオペラと改め、海外から歌手やスタッフを招聘したり、海外歌劇場との提携公演を行ったりするなど、いわゆる市民オペラの域を超えた積極的な活動を展開してきた。2010年4月からは、「社会的な信用をさらに高め、責任ある団体としてオペラを中心に音楽芸術の普及、向上によって地域の芸術文化の発展に寄与していく」ことを目標に掲げ、一般社団法人化された。その時に、オペラ上演だけではなく、新人や若手演奏家の育成にも力を入れるべく、従来あった「アンサンブルスタジオ」と呼ばれる研修機関を「堺シティオペラアカデミー オペラスタジオ」と名を改め更新し現在の姿になった。

他の二つの団体が持つ研修所と大きく異なるところは、他の団体があくまで自団にプロの歌手としての人材を供給していくため、一定の年数をかけて舞台に立てる歌手を研修、育成していく機関であるのに対して、この団体のアカデミーは、もちろん上級のクラスではそうした人も育成する目標は持っている

が、もう少し大きく門戸を開き、多様な目的を持った人が学びに来ることができる場にしているということである。つまりここでは必ずしもオペラ歌手を目指す人ばかりが学んでいるわけではないのだ。

こうした形でアカデミーを設定しているのは、このグループが公演を行う際、キャストिंगを自分たちのグループに所属するメンバーに限定せず、広く門戸を開き、誰もがオーディションに応募できるシステムを取っているため、いわば自前で歌手を養成せねばならないという切迫した課題がないからである。それにこのグループは、海外の劇場などとの提携により、より芸術性の高いアーティストを招聘したりしている。そうしたことから、そうした優れた人たちと交流できるというメリットもあるので、オーディションには能力を持った少なくない人が応募してくるそうだ。そしてこうした交流が、ひいては若手などの養成に繋がっていることは言うまでもない。こうした団体の在り方から研修所の在り方が他とは違って当然ということになる。

現在アカデミーには、音楽大学、短期大学卒業生・在學生、または、それに準ずる実力を持った者を対象に、オペラに必要な演技の基本動作やスコアの読み取り方などを学び、歌唱技能の充実を図る①ジュニアクラス、音楽大学卒業生、または、それに準ずる実力を持った者を対象に、オペラの基礎技術を基本として、正しいディクシオンや音楽表現を、レチタティーヴォやアリア・アンサンブルを通して実習するという②シニアクラス、音楽大学卒業生、または、シニアに準ずる実力を持った者を対象に、よりレヴェルアップした内容で、国際的にも適応できる実力を養い、演出家による講座も設け、オペラ歌手としてのレヴェルアップを目指すという③アドヴァンスクラスの3つのクラスが設けられている。これらはいずれも1年コースであり、そ

れらのコースを積み上げていって歌手を養成するというのではなく、それぞれのコースの目標にかなった人が、各コースを志願してくるというスタイルをとっている。試験課題も①は任意のオペラアリア1曲、②③は、任意のオペラアリア1曲と歌曲の計2曲というように、かなり緩やかである。

研修は、各コースに掲げられた目標に沿って、年間31回+ $\alpha$ （試演会）の授業が2時間半の枠で行われるのが中心となるが、①では舞台の基礎知識、演技演習基礎、ディクシオン基礎、歌曲研究、オペラ演習、メイク講習、芸術鑑賞などを内容とし、②ではオペラ実習、ディクシオン、演技演習、メイク講習、舞台表現、作品の理解と歌唱のための外国語などを内容としている。③でもその内容はオペラ実習、ディクシオン、演技演習、メイク講習、舞台表現、作品の理解と歌唱のための外国語と基本的には変わらない。そしてこうした通常授業以外にも、特別講座として、身体表現、ドイツ声楽曲、フランス声楽曲などが適宜に加えられ、様々なコンサートやオペラ試演会への出演、そして前期後期の終わりにはソロ試験も行われる。各コースはそれぞれ①15名、②13名、③10名の定員を持つが、ここ数年は①は約5名、②は昼夜二つのクラスで約10名、③は5~6名の受講生で推移していたが、2014年は、①が4名、②が3名、③が5名と減少しているとのことである。

この団体の代表エグゼクティブプロデューサーの坂口茉莉氏によれば、この団体は、このほかにも、これから歌を始めたい人やもっとうまくなりたいと思っている人を対象にした「土曜日クラス」というものや、5歳から15歳を対象にした「夏休みキッズ・クラブ」というものを持ち、地域で音楽やオペラに関心のある層を増やしたり、啓蒙活動などにも力を注いでいるようだが、このような点から

見ても、この団体の研修、教育活動が、他の二つの団体とは基本的に異なっていることが分かる。

以上が三つの団体の研修制度やその実際のあらまですが、各団体の性格や成立のいきさつなどが反映されたものになっているという印象が強い。そして、それぞれが様々な工夫を凝らしながら、後進を育む努力を展開し、関西の音楽文化の向上のために多大な貢献を果たしてきたのである。しかし彼らも問題を抱えていないわけではない。いやむしろ容易には克服できない多くの難しい問題を抱えつつ、研修活動を展開してきたと言ったほうが当たっているだろう。ここでは彼らが抱えている研修機関の運営に関わる問題点をいくつか挙げ、それを克服していくために今何が必要かについて考えておくことにしよう。

### ■ 関西の研修所が抱える問題点

ここでは紙幅に限りもあるので問題点を三つに絞ろう。その三つとは、何よりも運営資金の問題であり、つづいては研修場所の確保の問題であり、最後は、近年におけるクラシック音楽を学ぼうとする若者の減少の問題である。第1の資金の問題は、第2の場所の問題にも関わってくる。各団体とも、研修所の運営は基本的に受講生によって支払われる受講料によってまかなわれているが、大学や大学院で既に多額の授業料を払い続けてきた人たちからさらに大きな額を徴収するわけにも行かず、各団体は授業料を最小限に抑えている。それぞれが研修生に対して行う研修は、基本的に約3時間前後を週に1度、年間30回ほどということになるが、これで十分に満足のいく研修が可能かといえば、なかなか難しいというのが本音であろう。ただそれらに加えてより充実した講習を行おうとすれば、当然費用はかさむし、より良い講師を遠

隔地から招く必要も生じ、とても徴収した額でまかなうことができないのが現実である。

それに場所の問題も容易に解決できることではない。各団体ともに専用の練習場を確保してはいるが、それは研修のためのみに使われるわけではない。それぞれの公演準備のためにも使われるわけで、当然様々な制約が生まれる。例えば同じ日に別の研修を行おうとしても、授業を同時に並行して行うことができるほどの場所が確保されていないのが現実なのである。これも結局は、団体を維持していくだけの財政的な裏付けが簡単には得られないということに起因している。そうした厳しい中で各団体が知恵を絞り、それなりの成果を挙げているのは、もう各団体の血の滲むような自助努力以外の何ものでもない。

しかしこれが簡単に克服できる問題でないことは、誰の目からも明らかである。東京に続く大きな音楽界を形成している大阪であってこのような厳しい状況なのである。これを少しでも良い方向に向かわせるには、それぞれの中味を精査した上ではあるが、公的助成を待つより他ないであろう。単純な他者依存は今や時代遅れではあるが、やはり維持し残さねばならないものは残さねばならない。唯一の国立のオペラ研修所は新国立劇場にあるが、ここでは多額の公的資金をつぎ込みながら、年にわずか6人の研修生しか受け入れていないことを考えるなら、国はオペラ振興、あるいは人材育成のための拠点となることを日本のいくつかの都市にある団体に定め、それなりの助成をしていくべきだと考えるがいかがだろうか。オペラ公演を行うための助成も、もちろん大事ではあるが、さらに人材育成にももっと目を向けないと、わが国のオペラ活動の将来はない。

最後にクラシック音楽を学ぼうとする若者の減少は、音楽大学の存在そのものさえ脅かすほどに深刻になりつつあるが、当然それは

こうした団体の研修に応募する人の減少に繋がっている。このことを克服するのは、若年人口の減少や、学びの負担の増大、さらにはわが国における音楽文化に対する理解の少なさなど、若者を鼓舞する条件に不足しているため容易なことではないが、音楽界がこうした問題を解決したり克服したりするためには、もはや一団体や一業界で奮闘するだけでは効果はない。この問題は一音楽分野のことに限ったことではなく、むしろ芸術全分野、いや学術全分野も含めて、今後の日本におけ

る人材育成をどのようにしていこうと考えているかに関わっている。各分野は、それぞれの自助努力で優れた成果を挙げることに努力すると同時に、決して利己的にならず、互いに連携して日本の将来を考える、大きな、また長期的な視野に立って努力していかねばならない。決して易しいことではないが、そうした不断の努力なしには、この問題は決して克服し得ないであろう。教育に携わるすべての分野の人々の積極的な議論と結束を強く促したい。